

## 「敵をすり替える悪魔」

エペソ人への手紙 6 : 10 - 13

November.9.2025

### エペソ人への手紙 6 : 10 - 13 (パウロ)

#### Preface

エペソ書の結論部分に至っております。

前回のメッセージで、「イエス・キリストに出会い、神を信じ、神を知るということは、それまで戦う相手を間違っ生きて来たということに気付くことだ」とお話をさせて頂きました。

即ち、目に見えている人や物事が戦う相手ではなく、目に見えることはほとんどないかもしれないけれども確かに存在し、神に敵対することをその生業とし、唯一神の似姿に創造された人という存在を攻撃することが最も神を悲しませることを知っている輩、まことの神を知らない暗闇の世界に人を閉じ込めておこうとするこの世の神、この世の流れや情勢を作り出し、人をまことの神なき雰囲気・空気感に留め続けようと狡猾に立ち回っている悪魔・悪霊との戦いこそが、人にとって、そして、三位一体なる神を信じるキリスト者にとっての真の戦いだということです。

本来、人の敵は、人ではありません。

ゆえに、そのことを悟らされているだろうキリスト者の戦う相手も、当然ながら人ではありません。

さらに言いますと、人にとって人という存在は愛する対象であり相手であり、愛を表し、愛を育み、愛なる神を、神の愛を共に体現していく仲間であり、それ以上に、神をかしらとする互いに尊重し合う無くてはならないからだの部位のような存在で、神にあって一体であることを共に喜び、その喜びを味わい尽くす間柄です。

元々、人にとって人が敵であるという世界観は、この世界の始めには存在していませんでした。

でも今の世界においては、人の敵はいつも人であります。

生まれたその瞬間から比較という敵対関係の中に身を置きながら、あたかもその敵対関係が当たり前のように思われ、思い、いつの間にか人を敵としながら、また時には、「自分に勝つことが真の勝利だ」なんていうそれらしい飾り言葉とともに、自分という存在さえも自らの敵として日々を生きていきます。

あたかも、それが当たり前のようにです。

そして、その当たり前だと思われている人を敵とする世界観・価値観を作り出し、その誤った当たり前に、いのちや大事なものをかけさせるように誘い、本来神がお造りになった世界とは全く違う世界観や価値観を人の心に植え付け

ながら、今も絶え間なく育んでいるのが、悪魔という輩です。

悪魔のなす最も大きな仕業は、「人にとっての敵は、人だ」と思わせることです。

## Part One

悪魔・サタンの起源については、また次回以降詳しく見ていきたいと思いますが、簡単に言いますと、比類なき神という唯一始まりのない永遠なるお方に、「自分も神のようにになりたい」という思いを抱きながら反旗を翻した元天使長と、その元天使長の神に対する反旗に賛同して共に墮天使となった元天使たちです。

ミカエルやガブリエルという天の御使いたちの長だと思われる存在が聖書に登場してきますが、このミカエルやガブリエルの前の天使長だった存在がサタンであり、それに従った1/3の元天使たちが悪魔たち・悪霊たちとなったと推測されます。

ですので、サタンは、神の対立者ではありませんし、神の対立者には成り得ません。

サタンは神の対立者ではなく、ミカエルやガブリエルの対立者です。

勝手にサタンが神に敵対しながら、あたかも自分を神のように見せつけたいと臭わせているだけで、時の始まりという時間の制約の中にはおられない永遠の昔から唯一自己自身によって存在しておられる無二の力をお持ちの神に対立者は存在し得ません。

悪魔や悪霊の話、または聖霊なる神という超自然的な存在についての認識や話は、私たちをもって主イエス・キリストをより深く信じさせ、感激させ、私たちが信じ所有しているものたちがどれほど偉大で栄光に富んだものであるのかを確証させてくれますが、今日の物質主義的見地に支配されているこの世界に生きるまだ神を信じておられない方々のみならず、教会やキリスト者たちにとっても、サタンや悪霊の話はあまり馴染みのないと言いましょうか、憚ってしまうようなものになっているような気が致します。

残念なことだと思いますが、クリスチャンたちでさえも、この悪魔や悪霊の存在とその仕業について口にしたり、考えたりすることを憚っているのが実情かもしれません。

その理由はただ一つでしょう。

この目に見える世界において幸せであることが人生の目標となっているからでしょう。

さらには、信仰の目標であり、その幸せを追い求めるために信仰を、または、「神をどう利用させて頂こうか」ということばかりを考えているからなのかもしれません。

いい物を食べ、いい服を着て、いいところに住むことは、意外とまあそれなりに出来てしまっている、出来る可能性を十分に秘めている世界を作り上げ、

その世界があたかもすべてであるかのように生きてしまっているからなのかもしれません。

もちろん、いい物を食べ、いい服を着て、いいところに住むことは、悪いことではありませんし、神様の恵みであり、祝福でしょう。

でも、これが聖書の語る祝福の本質ではないですよ。

聖書の語る祝福とは、いつでも神との関係です。

どんな条件、どんな状況にあっても、神との関係こそが祝福そのものであり、神との関係ゆえに、どんな境遇にあっても満足出来るところへと導かれていくというのが、祝福ゆえの恵みです。

正に、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願ったために迫害を受け、獄中の中で、今このエペソ書を書いておられる使徒パウロ先生が享受しておられる祝福そのものです。

使徒パウロ先生が見ているところは、この世とは違いました。

### ピリピ人への手紙 3：7－4：1（パウロ）

これが、私たちの戦いです。

「悪霊とか、聖霊とか、変にそんなこと口にしたら怪しまれちゃうでしょ」と言いながら、または思いながら、神ではなく人目ばかりを恐れるようになる。

そしていつの間にか、キリスト・イエスを知ることよりも素晴らしいことができ、ちりあくたどころか、この地上の素晴らしさを装っていることだけを考えているうちに、神の国の価値観がその生き方に反映されなくなってしまうようにサタンによってすり替えられていく、サタンの価値観や世界観に飼い慣らされていくことに対する戦いです。

毎週の礼拝の中で祈る主の祈りの中で、「神の御心が天で行われるように地でも行われますように」と祈り、イエス様が、「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと心配しなくてよいのです。まず神の国と神の義を第一に求めなさい。そうすれば、それらのものはすべて加えて与えられます」と仰ったように、私たちに求められている視野・世界観は、「手で触れ、目で見て、耳で聞くこの物質世界のみが、こそが確かなものだ」とうそぶく世界の背後にある、目に見えない確かな神の国の視野・世界観です。

決して、「この世のことをないがしろに、どうにでもしていい」ということではありません。

むしろ、その逆ですね。

不確かなこの世界を確かに生きる、大事に生きる、尊く生きるために必要不可欠な視野が、目には見えないけれども、目に見えないからこそ確かなまことの神との関係です。

そして、その関係を壊そうとしながら、物質世界における敵対関係ばかりを助長し、集中させようとしている悪の霊的存在を知り、認めることです。

## Part Two

C.S.ルイスという方が書いた「悪魔の手紙」という著書の中で、こんな風に悪魔について言っています。

「悪魔に関して人間は二つの間違いに陥る可能性がある。この二つは逆方向だが、同じように誤りである。すなわち、その一つは、悪魔の存在を信じないことであり、もう一つは、これを信じて、過度の、そして不健全な興味を覚えることである。悪魔どもは、この二つを同じくらい喜ぶ。すなわち、物事全てを物質とみる唯物主義と、まじない・占い・迷信・人の作った宗教等を同じようにもろ手を挙げて歓迎する。」

そしてもう一つ、悪魔についての重要な特徴をこう言います。

「悪魔は嘘つきだということを忘れてはならない。」

悪魔は嘘つきです。

誰に対して？

人に対してです。

なぜ人に対してなのか？

人は、唯一神の似姿に造られた特別な存在であり、人を躓かせ陥れることが、神を最も悲しませることだからです。

では、どのように悪魔は、人に嘘をつくのか？

色々な嘘のつき方があると思いますが、特に今朝考えたいのは、「敵をすり替える、戦うべき敵をすり替える」ということです。

先程のパウロ先生の告白にありましたように、天に国籍がある聖徒らしい神の国の視野によってこの世で神の国を生きる戦いから、欲望を神とし、恥ずべきものを栄光として、地上のことだけを考える戦いへと、すり替えていきます。

そんな風に、私たち人間に、地上のことだけを考えるように仕向けていく上で悪魔にとって最も大事な策略こそが、人を敵だと思わせることです。

人に対して人を敵だと思わせ、人と人を互いに傷つけ合わせ、憎しみ合わせ、互いになくてはならない体の部位同士であるというその関係を崩壊させることです。

人同士の関係を壊させて、神との関係も疑わせ、最終的に神を敵だと思わせることです。

前回のメッセージの中でも、人を敵だと思わせることについてお話し致しましたが、その大元となる聖書の御言葉が、創世記1章から3章の御言葉です。

人が人を敵とし、神を敵としてしまった起源について記録しています。

## Part Three

**創世記1：26－28（パワポ）**

神は、人を、すべての被造物の中で唯一神の似姿にお造りになりました。

神の似姿ということを一言で言いますと、「尊い」ということです。

人という存在は尊い存在であり、人を見れば、そこに神なるお方の尊さが表れるということです。

そして神は、人を、男と女にお造りになりました。

互いに互いを尊い存在として認識し、関り、一体となって共に生きる無二の存在としてお造りになりました。

創世記 2 章では、「あなたは私の骨からの骨、私の肉からの肉。あなたは私自身であり、あなたという存在あつての私です」と、これ以上ない表現を用いながら人類史上初のラブソングをアダムがエバに捧げ、喜んでいる姿が描かれています。

そして何よりも、そのような互いが互いにとって無二の尊い存在である関係は、神との関係の中で育まれ、表されるものでありました。

私たちの信じる神は、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体なる神ですが、神とアダムとエバというこの関係も、三位一体なる神のお姿に似通ったところがあります。

つまり、それほどに、二人の人間関係は完璧だったということです。

ところが、この関係を壊したいという輩が登場してきます。

関係こそが人としての尊さであり、また神との関係こそがとこしえのいのちの源でありましたが、この関係を壊したいと、この関係を壊すことによって、人と人とを敵対させ、人に神を敵だと思わせるように仕向けようとする輩が登場してきます。

創世記 3 章です。

### 創世記 3 : 1 - 13 (パワポ)

サタン・悪魔の特徴は、先程も言いましたように、嘘つきだということです。

嘘つきとは隠れることであり、本性を現さないということです。サタンも隠れ、本性を現さず、蛇という野の獣の背後に身を隠しながら人に近づいて行きました。

この蛇の背後に隠れ、蛇を装ったサタンの真の姿をヨハネの黙示録 12 章では、大きな竜、古い蛇と記しています。

### ヨハネの黙示録 12 : 7 - 9 (パワポ)

全世界を惑わす者サタンとか悪魔とか呼ばれる者の真の姿は、大きな竜のようであり、長年汚れたあざとさを果てしなく積み重ねて来た古さばかりが目立

つ古ぼけた蛇のようなおどろおどろしい姿です。

ところが、そんな姿を隠して、かわいくも見える静かで小さな蛇の姿を取って人に近づき、うそぶきました。

何とうそぶいたか？

「神は本当に言われたのですか？」と丁寧な敬語まで使いながら、神を疑うように人を（アダムとエバを）誘います。

そして、これこそが、人類最初の神への疑いの心の芽生えのきっかけです。

「ただ何となく、漠然と、なんだかよく分からないけれども、生まれながらにして本能的に神というお方の存在に対する疑いの心を持っているのではなく、人が神を信じないようになったのには、ちゃんとした理由がある」と、「サタンの策略があったんだ」と聖書は教えてくれます。

そして残念ながら、「神のようになりたい」という造られし者としては有り得ないサタンと同じような気持ちをアダムとエバも持って、その捻じ曲げられた欺きを人は受け入れてしまいました。

その欺きを受け入れた結果、アダムが豹変します。

「あなたこそ私の骨の骨、私の肉の肉。あなたは私自身であり、あなたの存在あつての私です」と愛するエバを喜んだのに、創世記 3：12 を見ますと、「この女が、この女めが、この女のせいでこんなことになってしまった」と、男の持つ肉体的な優位性を最大限に発揮しながらだったでしょう。

物凄い形相と威圧感でエバを捲し立て、責め立てました。

エバが、アダムにとって敵をなってしまった瞬間です。

そして、エバにとっても、アダムは全幅の信頼を寄せることの出来ない敵となってしまった瞬間でした。

さらに、アダムにとっても、エバにとっても、三位一体なる神様に似通ったところの有った、神をかしらとするアダムとエバの関係という比類なき美しいハーモニーの関係を自らの意思で壊してしまい、神さえも敵のように感じてしまうところへと陥っていきました。

これが、人の不幸の始まりであり、のろいの始まりです。

続けて創世記 4 章を見ていきますと、そんなアダムとエバから生まれた来た長男カインは、次男アベルを嫉妬に駆られて敵とみなし、殺してしまいます。

人類最初の殺人事件は、美しく、幸せしかないはずの家庭、家族関係の中で起こりました。

そんなカインの血筋から生まれて来たレメクという人は、「誰かが私を傷つけるようなことをしたならば、倍返しどころか、77 倍にして返してやる」とこともなげに平然と、いやむしろ、胸を張って堂々と、人々や世に向かって言

い放ちました。

こんなレメクの姿は、現代における日本を含めた諸外国のリーダーたちの姿に重なりませんか？ 重なってしまいます。

そして、そんなリーダーたちを選び、立て、そんなリーダーたちに投影される私たち自身の姿が重ならないでしょうか？

「いや、少しも重ならないなあ」と、もし思われるならば、サタンと同じように嘘をついていることになるでしょう。

## Conclusion

レメクの 77 倍の復讐宣言から今の今まで続く人類の歴史において、戦争が止んだためしがありません。

今の日本を見てもそうだと思いますが、80 年間戦争をやらないでいると、戦争がしたくてうずうずしているような、これまで一応御法度のような扱いを受けて来た潮流が表に滲み出てきて、しかも、「その潮流に身を任せたい、身を任せよう、身を任せて、また世界に誇れる国を建て上げよう」なんていう敵対関係を称賛するかのような雰囲気を受け入れられているようになって来たようには感じないでしょうか？

しかも、天の御国に国籍があるクリスチャンでさえも、世の作り出すナショナリズムに乗かって、天国人であることよりも、日本人、韓国人、中国人、アメリカ人、イスラエル人、何とか人という分断の象徴である民族性を優先しようとする、正に、敵をすり替え、神の言葉をうまい具合に捻じ曲げる悪魔の策略にまんまとハマってしまっているかのような姿がちらほらと見られるようになっていると思うのは、気のせいでしょうか？

時間が来てしまいましたので、今日はこの辺で終えたいと思いますが、今、私たちが見据えなければならない敵は、人ではありません。

神でもありません。

悪魔です。 敵は悪魔です。

敵をすり替える策略と工作に誰よりも長けている悪魔こそが敵です。

もし今、皆さんに、私たちに、私たちの身近に、憎い人がいるならば、赦せない人がいるならば、責め立てたい、見下ろしたい、詰め寄りたい、批判したい人がいるならば、その人が敵ではないことを祈りをもって、神の御言葉をもって、何よりも先ずイエス様から、聖霊様から示されたいと願います。

そして示されたならば、神とともに、イエス様とともに、聖霊様とともに、どう示されたことを具体的に実行に移すことが出来るのかを考えながら、少しずつでも愛を体現出来たらと願います。

私たちの敵は、人でもなく、神でもありません。 悪魔です。

お祈りいたします。 祝祷：エペソ 6：12